

氏 名：庄司 貴俊

学位の種類：博士（学術）

学位の番号：甲第 87 號

学位授与の条件：学位規程第 5 条第 1 項該当

学位授与の日付：2019年9月30日

学位論文題目：災害前の日常性からみる原発被災地域で暮らし直す仮構築の論理

(The Logic of Constructing One's Life as a Temporary State in
Returning to Daily Life in Areas Affected by the Nuclear Power
Plant Disaster)

論文審査員：(主査) 東北学院大学教授 金菱 清
(副査) 東北学院大学教授 佐久間 政広
(副査) 東北学院大学教授 高野 岳彦
(副査) 東北学院大学教授 松本 秀明
(副査) 東北学院大学教授 津上 誠
(副査) 岩手県立大学准教授 平井 勇介

審査結果要旨

本論文は、未曾有の原発事故後、居住制限や生産制限といった不条理に対して、福島県南相馬のある地区を事例に、そこに暮らす人々による暮らしの再構築の論理を明らかにしている。調査対象とする X 地区は、第一原発から 20km の距離にあり、警戒区域に指定されバリケードがはられ立ち入り制限されるなどし、居住制限がかけられたが、なぜか人々は早い段階でまるで原発事故以前のような普通の暮らしをたてていた。国による「早期帰還」あるいは帰還困難としての「仮の町構想」、このどちらにも組まない論理的立場の優位性が本稿からは見受けられる。すなわち、かつての社会学者であるロバート・K・マートンは経験的調査の社会学理論に対する意義の一つとして、第一に Serendipity タイプ（邦訳では「掘り出し型」）があることを指摘した。このタイプは、「予期されていなかった、変則的な、戦略的なデータを観察する」ことによって、「新しい理論を発展させたり既存の理論を拡充したりする」ことに貢献するとみられている。南相馬の当該地区というフィールドは、まさしくこの意味において、「予期されなかった、変則的な、戦略的なデータ」をもたらすものであるということが出来る。

本論の構成は全部で以下の 7 章から成り立っている。

序章において、本論の目的が示され、原発被災地域のフィールドワークから、居住制限や生産制限といった不条理に直面しているにもかかわらず、なぜ人びとが原発被災地で暮らし続けることができるのか、その論理を明らかにすることにある。これにより、原発災害という未知の大災害のなかで、生活を立て直す手法を模索することになる。

第一章「先行研究と本論の方法」において、原発事故後の被災者の生活について扱った諸研究を概観し、原発災害が人びとから剥奪した状況を詳細に明らかにした。本論によれば、原発災害により被災者が奪われたものは、「予見」という点にまとめられる。予見が剥奪された理由として、人びとの生活に関わる 3 つの次元が、原発事故により崩れたことがあげられる。すなわち、事故により避難を余儀なくされたことで、避難を続ける者／避難元地域に戻った者は、両者ともに 3 つの次元（①「空間の次元＝元通りの生活空間を取り戻せるイメージ」／②「時間の次元＝当該地域で暮らす者としての時間感覚」／③「関係の次元＝固有の誰かとして見られ聞かれる手応え」）が崩れてしまい、その結果として被災者の予見が剥奪されたと考えられる。本論を「予見論」として位置付ける。

第二章「原発事故が地域社会に与えた影響」において、原発災害がどのような災害であるのかを明らかにした。本論が対象とした地域では、原発事故により人びとは農業をやめ、かつ再開の意思すらもてなくなった。にもかかわらず、元農家は草を刈ったり除草剤を撒いたり、農地の手入れだけは継続している。原発災害が「直接的な被害はないが、自身を介する形で間接的な被害が起こる災害」を示したうえで、原発事故の特徴として、原発被災地の復興が国から利用されやすい側面を指摘する。しかしながら、本事例における元農家による農

地への働きかけは、国から利用されている空虚な営みではなく、地域独自の回復過程であることが三―五章で順次示される。

第三章「なぜ原発事故以後も農地と関わり続けるのか」において、元農家が生産活動をやめたにもかかわらず、事故後も継続して農地へ働きかけ続ける理由を明らかにした。恥の意識概念を用いて、原発事故前において人びとは他者の視線を前提に農地と関わっている点に着目する。それは、農地を荒らさないようにしていれば、人びとは恥をかくことはなく、働き者として集落の人から認知される。重要なのは、本集落では農家であれば「働き者」であると当然のように考えられていた点にある。それゆえ、事故後の手入れも、対等性が崩れてしまうと、人びとは認識しており、それを、本章では、“関係回復の論理”と位置付けている。

第四章「なぜ原発事故以前と同じ周期で農地と関わるのか」において、原発事故後の避難指示により、集落に住むことがままならなくなった人びとが、いかにして避難している期間も当該地域の人間で居続けることができたのかを明らかにした。人びとが事故後もそれ以前と同じ周期（農繁期と農閑期の生活リズム）で、農地へ働きかけ続ける理由とその社会的意義に、当該地域の人間で居続けることができた論理を導きだした。それを、“再定住の論理”と定義している。周期に沿った農地への働きかけは、避難元地域である集落の住民、すなわち当該地域の住民資格の担保を可能としている。これは3つの次元のうちの、「時間の次元」への対応と回復がなされていると判断している。

第五章「仮定的な予見」において、事故後の避難によって崩れた、人びとを取り巻く3つの次元のうちの「空間の次元」が、どのように回復されているのかについて、事故後の農地の状態に着目し明らかにした。本章では、“仮定的な予見”が空間の次元の回復を促しているとした。人びとが生産活動をやめたことで、農地の生産能力は低下しているが、それでも農地としての体裁は保っていると、人びとは認識している。農業を再開しようとするれば、いつでもできる状態にあると、人びとが考えているからである。それは、当人に意欲がなくとも、自分の子や孫が望めば農業ができるため、遠く将来において子孫が農業を行っている姿も想定できる（これを本論では、「仮定的な長期予見」と置く）。これは「空間の次元」の回復がされていることと判断される。

終章「結語」において、人びとが原発被災地で暮らし続けることができる理由は、原発災害後の継続的な影響を打ち消す力が、農地への働きかけにはあるからだといえる。原発事故は人びとの生活に関わる3つの次元（関係／時間／空間）を崩壊させた。けれども、本論が対象とした人びとは、これら3つの次元を農地の手入れを続けることにより回復させているという「発見」がある。「元に戻る」と「元に戻らないこと」の中間に人びとの生活はある。「今」の暮らしを暫定的なものにすることで、事故によって崩れた3つの次元を回復させ、1度は奪われた将来に関わる予見を人びとは取り戻している。

このように本論が対象とした人びとは、「今」に縛られることなく生活を営むことができている。自らの生活を「仮」の状態において暮らしを立て直していくことを、本論では“生活時間の仮構築の論理”と名付けて分析を行っている。以上の知見は「元に戻る」「元に戻らない」という二元論から一度距離をとるといふ、原発災害へのひとつの対処の在り方を示唆している。「仮」の状態をつく

ることで、復興完了までの猶予期間を生み出すというものである。これは原発災害という未知の災害のなかで、人びとが暮らし直すためのひとつの対処となる。

以上の理論的関心と実践的関心に導かれながら庄司氏が描いたものは、生活時間の仮構築の論理という、身体感覚で了解できながらも当事者が言葉にもならない理屈を、これまで語られることのなかった生活論と国や行政の原発復興政策ではない形での復興のあり方とを結びつける「ミッシング・リンク」として位置づけている。

庄司氏は、この手ごわい、だが社会学的研究にとって実に挑戦的で魅力的なフィールドとの格闘のなかで、現時点で望みうる最大限の諸理論を、ときには牽強付会一步手前まで押し進めることによって活用し拡充することに成功している。

数年にわたる断続的な聞き取りと地元の人びとからの圧倒的な信頼性を確保したうえで獲得されたフィールドワークの蓄積量と質の高さも高く評価できる。社会学的フィールドワークの多様な展開と水準については幾多の報告や研究論文が見られるけれども、庄司氏のそれは基礎的情報の「掘出し」に加えて、諸理論との交差（ないしはすれ違い）を執拗に浮き彫りにしている点で優れている。

与えられた歴史的個体を明確化するうえでは本論文は申し分がないとはいえ、諸理論の正統な解釈に基づく活用や拡充に洗練の余地がないわけではない。本論文をさらに多くの読者に向けて刊行するさいには、そうした努力が必要である。さらに大きな課題は、本論文が南相馬の局所的地区という固有のフィールドに捧げられていることから容易に分るように、仮に同じく「原発被災地」の性質の異なったフィールドに出会うならば、また異なった諸理論の追加や改善が求められるという点である。庄司氏には、これからも当該地区同様に手ごわい、だが挑戦的で魅惑的なフィールドとの偶然の出会いという Serendipity を期待したい。

最終試験の結果

以上、本審査委員会は、本学位論文の内容と研究活動を慎重に審査し、2019年7月22日に行われた公開の最終審査面接の結果をも加味して判断し、庄司貴俊氏は博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいとの結論を得たのでここに報告する。